

小学校教員として必要なソルフェージュ能力

水 嶋 育*

Required Ability Levels of *Solfeggio* for Elementary School Teachers

Ikumu Mizushima

要約

本稿では指導者として学習指導要領に沿った小学校の音楽科授業を行う際に習熟しておくべきソルフェージュ能力（読譜力・記譜力）に焦点を合わせ考察している。主に本学発達科学部の1年次および2年次に在籍中の学生に対するテストやインタビュー等による実態調査をもとに現段階での習得レベルを明らかにし、その結果を3年次に彼らが受講する音楽指導法研究の授業計画において効果的に反映させるべく研究する。

キーワード：小学校教員養成、音楽教育、教師のソルフェージュ

(Abstract)

In this article, I will focus on solfeggio (the reading and musical ability) with which one needs to be familiar with when conducting elementary school music classes in accordance with the instructional guidelines as instructors. Through interviews and tests with 1st and 2nd year students of the Faculty of Human Development of Takamatsu University, I will clarify the students' current levels. I will use these results to plan effective instruction methods for 3rd year students.

Keywords: Elementary Teacher Education, Music Education, Solfeggio for teachers

はじめに

平成 29 年 3 月に公示された小学校学習指導要領を読んでみる。音楽を含む 10 教科のうち多くの教科でその目標について示された文中には「親しむ」、「楽しむ」、「良さを認識する」、「喜びを味わう」等の「学習活動あるいは教材自体を楽しむこと」を意図する表現が見受けられる。殊に音楽は図画工作と並んで芸術系の教科であり、経験が浅いもしくは皆無の児童であっても初学段階から本能的にその学習活動を楽しみ始めることが可能である。その一方でそれぞれの児童が就学前の幼児期にどのように音楽活動に携わっていたかにより、初期における理論的な理解力には大きな幅が出てくるのも事実である。

本学学生たちとの会話の中で、「ピアノ演奏や歌唱が苦手だ」と悩む声が聞かれても、幸いこれまでに音楽そのものが嫌いだ（「音楽を鑑賞したくない」）という学生には出会っていない。クラシックかポップスかジャズかラテンか、その他多種多様のジャンルの違いや程度の差こそあれ、少なくとも鑑賞活動においては各々に音楽の楽しみ方を知っている。少なくとも教科目標の重要な部分が達成されていることを知るのは心強い。

では、学校教育を修了し、現在音楽の学習に苦手意識を持つ学生たちのその最たる原因は何なのか。本学の音楽関連の授業を担当する中で日ごろ受ける印象から、全ては不十分なソルフェージュ能力に起因するのだろうと推測できる。この推測に従い能力テストを実施し、その結果と新学習指導要領の要求するものを比較し、検証を行なう。

1. 新学習指導要領にみる教科目標

さて今回の学習指導要領改訂において、音楽科の教科目標は育成すべき資質・能力別に 3 つの分類化がなされたとされている。その資質・能力とは(1)知識及び技能 (2)思考力・判断力・表現力等 (3)学びに向かう力・人間性等で、それぞれの資質・能力の獲得に関して次のようにその目標を掲げている。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

これらの目標達成のための授業が、全ての項目において指導者として適度の読譜・演奏力有らずして成立し辛いのは一目瞭然であるが、殊に項目(1)に関してはそれらを容赦なく要求される。

ところが雑なレッテル貼りを強行してしまうと読譜・演奏とは、教科「音楽」を不得手とする者が「楽しみにくい」項目である。音楽鑑賞自体が嫌いでないにも拘わらず読譜・演奏を楽しめない。これをもう一方の芸術系教科図画工作にあてはめると美しい絵を愛でる気持ちはあるが、自身が筆を持つての描画は苦手ということになろうか。ただ小学校の音楽の

授業において実技を学習しようとする、個人レベルの活動よりもグループ単位、あるいはクラス全体で活動することの比率が高くなる。教師が注意深く細やかに個々の児童に寄り添うのは難しい。特に理論の理解に関しては上述のとおりスタート時点での初学者と既習者との能力差も顕著であろう。初期段階でのスムーズなアプローチに失敗すると知識や技能の習得はますます難しくなる。

教師が「知識や技能」に関して魅力的な題材や効果的なアプローチ法を提供出来ずにいると教科目標の達成はどんどん遠ざかっていく。教職を志望する現在の学生たちの能力の度合を見てみると無理もない。彼らが数年後に教科「音楽」の教壇に立ち、児童の「知識や技能」を学ぼうとする意欲を掻き立てるような授業を行えるとは、なかなか想像し難い。というのも現段階で学生たちの持ち合わせている読譜能力不足が非常に気にかかるのである。なお、ここで意図する読譜能力とは、性質上、後のテスト項目にある新曲視唱やあるいは視奏の速読力も自動的に含まれてくるが、どちらかというとな楽譜の要素の意味を把握できているかどうかの主眼を置いている。

2. 現 1、2 年生のソルフェージュ能力の実態

2.1 ソルフェージュ・テストの受験者

平成 30 年度より発達科学部子ども発達学科児童教育コースにおける授業「音楽指導法研究」を引き継ぐにあたって現在(平成 29 年 10 月)1 年次、2 年次に在籍する 15 名の学生の協力を得て極めて基礎的なソルフェージュ・テストを行った。これらの学生は筆者の担当するクラスの受講者たちで、授業時間内の数分を使って調査した。なお受験者となった学生たちの受講科目の内訳は「音楽Ⅰ」—1 年生 4 名、「音楽Ⅱ」—2 年生 2 名、「声楽」—2 年生 9 名である。この中には幼児教育コースを選択している学生も多く混じっている。したがってこのメンバーが決して小学校教員を目指し第 3 学年で「音楽指導法研究」を受講するわけではない。しかし、ここでは個人的な対応が目的ではなく、現 1、2 年生の受講開始前の能力を大まかに計り知る目的のためにテスト対象としている。サンプル数も少ないが、「音楽指導法研究」の受講者が 1 期 15 名ほどであると聞き、今回は任意に選んだこの人数の学生でテストを実施した。

テストの結果に見られる現在の学生の能力は、概して前途を危ぶまれるものであると同時に、見方によっては称賛に値するものである。懸念事項は、彼らの読譜力・記譜力が将来教壇に立つまでに、それに耐えうる基準にまで引き上げられるかどうかである。一方で称賛されるべきは、筆者の予測を大きく裏切るほどの読譜力・記譜力の不十分さにも拘わらず、ある一定レベルの歌唱や演奏活動を行える者がいるということである。

2.2 ソルフェージュ・テスト内容

15 名の受験者に対して行ったインタビューおよびテスト内容は次のとおりである。

- a. テストに先立ち、学校音楽の授業以外での音楽活動の経験についてインタビューする。

- b. 新曲視唱テスト
- c. 階名唱テスト
- d. 聴音と記譜力テスト

2.2.1 音楽活動の経験に関するインタビュー

a の学校音楽の授業以外の音楽活動とは、個人の習い事の他に学内外の部活動、サークル活動等を含めたものである。15 名中

10 年以上のピアノ経験者	3 名
3 年前後のピアノ経験者	3 名
3 年前後の吹奏楽部活動経験者	1 名
授業以外の活動が全くなかった者	8 名 (複数回答なし)

という内訳であった。10 年以上のピアノ経験者のうち 1 名は高校時代に 3 年間の合唱部活動、別の 1 名は幼児期に 3 年間のバイオリン、小学 5～6 年時にドラム、他に三味線の習い事と特に豊かな経験所持者であった。

2.2.2 新曲視唱テスト

b の新曲視唱テストではコール・ユーブンゲンの 18a) を使用。3 度音程の域を越えないレベルである。2 度音程はすなわち隣接音への進行となり単純過ぎると推測し、3 度音程跳躍を含んだもので最も容易なものをテスト曲とした。



譜例 1. コール・ユーブンゲン 18a) より、はじめの 7 小節のみ

最初の音の高さをピアノで与えて、音名唱をしてもらう。15 名中

18a) を見て一言も発せなかった者	2 名
とりあえず音名は正しく言えているが	
音高やリズムがあやふやな者	9 名
正しく歌えた者	4 名

一言も発せなかった 2 名が授業以外の活動が皆無であったこと、また正しく歌えた者 4 名のうち 3 名が上記の豊かな経験者であることは予測どおりであるが、残る正答者 1 名は授業以外の音楽活動経験の全くなかった者である。この学生については後に B さんのケースとして紹介している。

とりあえず音名は正しく言えているにもかかわらず音高やリズムがあやふやなのは、何に起因するのであろうか。

音高が不正確な原因のひとつには、発声の未熟さという問題もあるが、音名（あるいはハ長調階名）と実際の音高が感覚的にまだ連結されていないのだ。（絶対音感である必要はなく、音程の一部としての音高である。） 試しにここにランク付けされた受験者のうち 5 名に同じ楽譜でピアノ視奏を頼んだところ、これには全員成功している。まずはハ長調やイ短調の曲でひたすら階名唱の訓練を取り入れていけばよい。必ずしも新曲である必要もなく、少しでも親しみやすいように学生がよく知っている曲を階名唱すればよい。その際注意すべきはたとえソルフェージュ能力を鍛えるための歌唱であっても、必ず始めに発声練習を行い、出来る限り声を整えておくことである。ピッチが不安定なまま訓練すれば、むしろ逆効果になってしまう。

今回の新曲視唱テストにおいては、リズム読み取り能力の低さのほうにより気にかかった。模唱ならぬ模打ともいうべきであろうか、リズム打ちを聴いて真似てもらう練習では学生たちが比較的正確に熟している印象があったのでつい騙されていたようである。リズム感には問題ないが、譜は読めていないのが実情である。音価のみを記したリズムカードを使用した段階的な基礎訓練がまだまだ必要だろう。基準となる 4 分音符との組み合わせで徐々に複雑化を施した訓練を行いたい。世にはリズム読譜力を鍛えるゲーム・アプリも見られる。音楽大学が監修しているようなものも存在するので、適宜授業内で学生に紹介したい。

2.2.3 階名唱テスト

c の階名唱テストではまず、調性や調号、階名について習ったことがあるかを質問。階名唱を実際に学校で行っていたかを質問。さらにト長調の「うみ」を使って階名唱を行なえるかどうかテストしようと考えたが、結局階名唱を行なえたものは一人もいなかった。11 名中調号や調性、階名について習った記憶のある学生は見事 11 名であったが、同時に「そもそも当時から理解できなかった」と「忘れてしまった」学生を合わせるとこれも 11 名であった。なお階名唱を実際に学校の授業で行っていたと回答したのは 11 名中 2 名であった。

基礎能力の乏しい者にとって厄介なのが階名唱の駆使である。しかも小学校音楽で歌唱活動の占める比率は非常に大きい。筆者は、楽譜と向き合い始めておよそ半世紀、学習者、演奏家、指導者として数えきれない程の楽譜を読んできた。演奏家としては難解な現代曲もレパートリーに多く加えていたため、読譜力はそれなりに備えている。それでも、階名唱の経験はなく読譜は専ら音名唱による。さすがに小学校音楽の共通教材程度の階名唱はこなせるが、それ以上のレベルになると新曲視唱では難しいだろう。それを、音楽専門外の小学校教員が指導し、児童に習得させることは一見相当困難なように思える。因みに高松短期大学保育学科での授業中に、挙手によるインタビューを行ったところ、実際に小学校で階名唱による指導を受けていたと答えた学生は、25 名ほどのうちたった 1 名であった。

現場の教員たちからは外方を向かれることがほとんどの階名唱であるが学習指導要領はここまで頑なにこの唱法を固持して譲らなかった。昭和 22 年の第 1 次試案以降現在に至るまで、いずれの改定版においても階名唱での歌唱指導を明確に指示している。階名唱の習得は音楽を理解するうえで極めて有意義である。それにも拘わらず、70 年という時を経て未

だに定着していないのは、やはりそれを巧みに指導できる教員数が不足しているからであろう。

しかし、教員は範唱できるように事前に準備しておきさえすれば良いわけで、階名で自在に新曲視唱を熟す必要には迫られていない。第1学年用の共通教材を見ると、4曲のうち2曲はト長調（うみ）とヘ長調（日のまる）である。いきなり教材の半数が移動ドで歌わなければならない曲である。ただその方法は視唱ではなく聴唱、すなわち第1学年児童は教師の範唱を聞いて模唱するだけである。つまり理論は棚上げしたままで、とにかく早い時期から無邪気に階名による模唱を行なわせ、音程を感覚で覚えさせようとする意図が読み取れる。さらに第6学年に至るまで児童が「階名で視唱」しなければならないのはハ長調とイ短調に限られている。要するに視唱に関しては固定ドによる音名唱となんら変わりはなく、「移動ド唱」に関してむやみに危惧の念を抱く必要はない。

2.2.4 聴音と記譜力テスト

dの聴音と記譜力テストでは10人に対し譜例2を、



譜例 2

2年生のうち5人に対しては譜例3~5を



譜例 3



譜例 4



譜例 5

試験官がピアノで演奏、学生に聴き取らせそれを記譜してもらった。

譜例1の聴音をした10名中

全く記譜に手を付けられなかった者	1名
2小節目の音が聴きとれなかった者	2名
音は聴き取れているが記譜出来なかった者	6名
正しく記譜出来た者	1名

7名は、音そのものは全て聞き取れその音名とリズムも理解していた。ただ、記譜に関しては3名が8分音符表記に成功した以外は、符頭を正しい線あるいは間に記入するのがやっ

とであった。符幹、符尾あるいは連符、ト音記号や拍子記号、小節線等を正しく表記できた者は1名のみであった。

譜例2に示した3つの課題に協力してくれたのは第2学年の声楽受講者中5名である。科目の性質上、音楽愛好家が多く在席している。

3つとも完璧に記譜出来たのは13年間のピアノ経験を持つ学生1名であった。3年間のピアノ経験を持つ学生も記譜は不完全であったもののメロディ自体は聴き取れていた。他の3名を加えても課題1は5名全員聴き取れていた。課題2の2小節目を聴音できなかったのは1名。課題3の2小節目では3名となった。音価の記譜完成度は譜例1の10名の平均に比べれば、良好であったが、まだまだ不安を払拭できるようなものではない。そもそも課題そのものが最低レベルに設定されているのだ。

この記譜に関する能力の低さが今回最も憂慮された事項である。教師には当然のごとく記譜力が求められる。学習指導要領第4章-2内容の取扱いと指導上の配慮事項(6)のウにおいては「つくった音楽については、指導のねらいに即し、必要に応じて作品を記録させること」とある。

今回のテストで耳では聴き取れて理解しているにも拘わらず、記譜出来ていないことがくっきりと浮き彫りとなっている。語学で言えば、文字起こしが出来ていない状態である。日本語であれ、外国語であれ、多少の間違いがあっても読者側の推察力で100%まで修復することも出来るが、音楽に関しては非常に難しい。(専門家が高精度で完成された楽譜上でミスを発見するのとは別次元である。)

記譜力向上についても、これをひとつの実技と捉えてひたすら練習を重ねてもらえない。漢字や英単語のスペルの練習と全く同じである。眺めているだけではなかなか身に付かない。意味を覚えるだけであるなら、単語カードのようなもので事足りるが記録できるまでには足りない。インプットしたものを正しく咀嚼しアウトプットするのは効果的な学習方法である。それが達成されれば確実に習得されたとも言える。これにはどうしても時間を費やすので、多くを宿題で補っていくしかないだろう。子どもや初心者用のドリルはごまんとある。おのおのが好む旋律をたとえ少しずつでも記譜できるように課題を与えるのも良いだろう。

2.3 特別な事例、耳コピーと楽譜凝視

その他、個別に目についた事例について述べておく。以下のいずれも学校以外の音楽活動経験が皆無であった学生の事例である。

Aさんのケース：

Aさんは、いわゆる「耳コピー」の達人である。この学生に筆者はピアノを指導しているが、いくら注意しても滅茶苦茶な指使いが直らない。むしろ、その不合理極まりない指使いでよく滞りなくパッセージが弾けると、指関節のしなやかさに驚くほどである。読譜力にも乏しく、4分の4拍子や8分音符等の意味も分からないらしい。

ところが演奏が好きで、しかも大変な努力家なのでソナチネレベルもそのまま弾けてし

まう。ピアノを演奏する家人がいるらしく、ずっとピアノの音を聴き続けていたせいかな耳で覚えた音楽を鍵盤上で探り当て再生する力が備わったそう。指導者がいないまま長期間を過ごした結果、演奏法はきわめて自己流で、矯正が困難になっている。既に小学校音楽の指導には差し支えないレベルに達しているのが救いである。

「耳コピー」自体は推奨されるべき素晴らしい能力である。ただ、将来指導者として足りるだけの読譜力を補わなければならない。このようなタイプに相当する学生には耳コピー力と読譜力のバランスを回復するまで徹底して新曲視唱・視奏を課することになる。幸いなことに、Aさんは音楽づくりも好きだそう。自分の作ったメロディを譜に起こすという目的があれば意欲的に記譜の勉強も出来るだろう。記譜が出来れば読譜力も同時に必ずアップする。

Bさんのケース：

非常に真面目で勤勉な Bさんである。筆者の受け持つピアノ授業の受講生の中ではスタート時点で持ち合わせていた能力の最も低かった一人である。本人もそれを自覚して、周囲の進度についていけるようにと、ピアノがなくても暇を見つけては机の上の架空の鍵盤上でまめに練習する癖をつけていたらしい。その成果は顕著で、不器用ながらも着実に上達している。

ところが驚いたことにその学生が、新曲視唱でも聴音・記譜テストでも周囲に比べかなり良い出来映えの結果を出した。確かに Bさんはピアノを弾くときに大変な集中力で楽譜に対峙している。そのせいか左右の手には気の毒なほど余分な力が入り、凝り固まってしまっている。楽譜を覚えてしまってから暗譜で弾くのではなく、視線は忙しく楽譜と鍵盤行き来している。その産物として譜面上の絵柄とピアノの鍵盤、あるいは自分の中のドレミ感覚をうまく繋げることが出来たのだろうと推測できる。

楽譜というのは慣れれば慣れるほど、譜読みの段階では大きく大雑把に眺めるものである。しかし、Bさんの場合その不器用さゆえにしつこく注視し続けた結果、しっかりとその画像が脳裏に刻まれるという特典を得たのであろう。

3 共通教材にみる楽譜の要素

それでは小学校音楽の授業を行うために、最低限どれほどの読譜力が必要なのか見ていく。学習指導要領の中で取り扱いを義務付けられている共通教材 24 曲のピアノによる簡易伴奏付き譜を取り出し、これらを楽譜の要素別に分析する。なおミニマムを極めるため、速度・強弱・発想・奏法・反復記号等はここではいったん省いておく。

譜表：ピアノ伴奏用の大譜表に歌の旋律がプラスされた 3 段構えが望ましいが、大譜表の右手パートを歌の旋律譜にした簡易バージョンを使えば 2 段構えの大譜表のみでも可能である。

音部記号： ト音記号、ヘ音記号

拍子： 4 分の 3 拍子、4 分の 2 拍子、4 分の 4 拍子

音符： 2分音符、4分音符、8分音符、16分音符、付点2分音符、
付点4分音符、付点8分音符
休符： 2分休符、4分休符、8分休符
調性： ハ長調、ト長調(調号＃1個)、ヘ長調(調号♭1個)、ニ長調(調号＃2個)
小節線と終止線

共通教材の読譜において最低限識別しなければならない要素は極めて少ない。指導者として使用するピアノ伴奏譜により多少の変化記号(＃、♭、♮)がこれに加わるが、ほとんど稀だと言ってよい。3連符もなければ、複合拍子もない。

さらに上述した共通教材における楽譜要素の他に、小学校音楽教育全体の中で取り扱わなければならないものが以下の通り加わる。

全音符、変化記号、フォルテ、メゾフォルテ、ピアノ、メゾピアノ、ブレス記号、8分の6拍子、クレッシェンド、デクレッシェンド、反復記号、タイ、スラー、アクセント、速度記号

これらを全て合わせても決して多くはない。国語の授業では比較にならないほど複雑でたくさんの漢字を取り扱うが音楽科ではいたってシンプルである。しかし、筆者が学生に課したテストで使用した要素はこの中のほんの一かけらで、それすらもまだ身に付いていないことも事実である。

そもそも楽譜の要素というものは意外と少ないものなのである。これらの要素が、多様に絡み合い重なり合って音楽は色とりどりに発展していき、その結果全く様相の異なる表現が生まれる。何も音楽に限ったことではないが、それが表現の面白味でもある。

いたって単純な音符の並べ方でも、演奏するには難しい音楽は出来上がるし、逆に譜面上複雑そうに見えても演奏してみれば意外と簡単だということもままある。つまり、音楽は音の並べ方次第でいかようにも変わる。ひとつひとつの単位を取り上げてこれを理解できるか出来ないかの判断を下すことは、先に例えた単語カードではないが甚だ非音楽的な方法である。ある一つの音とはコンテキストの中で初めてその存在意義を見出すものなのだ。

学習指導要領の教科目標の中にも12頁に「知識」に関する記載がある。

ここでいう「知識」とは、曲名や、音符、休符、記号や用語の名称などの知識のみを指すものではない。児童一人一人が、体を動かす活動などを含むような学習過程において、音楽に対する感性などを働かせて感じ取り、理解したものであり、個々の感じ方や考え方等に応じて習得されたり、新たな学習過程を通して更新されたりしていくのである。

おわりに

本稿では、現学生が将来教職に就き指導者として音楽の授業を行う際に必要となる読譜・記譜力について論じているため、その性質上非実践的な分解という作業を施すことになった。義務であれ趣味であれ、世間には無数の学習課題があり、またそれぞれに無数の学習方法がある。「すぐ出来る！」「すぐ分かる！」「たった5日間であなたも！」といった類の謳い文句は至る所に溢れかえっているが、そのどれを選択しても王道は存在しない。(あれば、学習指導要領に掲載されるだろう。) 学習の効率化を図る目的であればその方法は、それぞれ個人の問題に見合ったものが見つかるかもしれない。しかし地味な手習いとしての記譜の練習を省くのは、書かずしての漢字や、泳がずしての泳ぎのマスターを目指しているようなものである。バス譜表のどこにピアノの真ん中のド(一点ハ音)があるのか数度書けばあっという間に覚えてしまうだろう。「すぐ出来る！」ではなく多少の手間をかけることの効果を再認識したい。

音楽家であれば好きな音楽の譜面を見ただけでも感動に酔いしれることが出来る。それは読書と同じである。記号の羅列から美しい旋律が聞こえて来る。そこに標題がつけられていたり、詩のある歌であったりすれば、映像とともに温度や匂いやその他限りのないイメージが浮かび上がる。

程度はともかく、習慣的な訓練で初心者にもそういった想像はかなうようになる。(それが、すなわち視唱力となるのであるが。) 林柳波の「うみ」という誰もが知る詩がある。「うみはひろいなおおきいな、つきがのぼるしひがしむ」—これだけでも趣のある情景は思い浮かぶが、ここに井上武士作曲のシンプルなメロディを被せると瞬く間にその情景が息づき、脈動を開始する。そのような楽譜上のマジックをまず体験できるレベルに学生を導きたい。

引用文献

- ・ フランツ・ヴェルナー著、『コール・ユーブンゲン』大阪開誠館、2016年。
- ・ 文部科学省、『小学校学習指導要領』、
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf 2017年。

参考文献

- ・ 初等科音楽教育研究会編、『最新初等科音楽教育法【改訂版】』音楽之友社、2011年。
- ・ 国立教育政策研究所、『学習指導要領データベース』、
<https://www.nier.go.jp/guideline/> 2014年。